第５章　　学生の受け入れ

（１）現状説明

点検・評価項目①：学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。

評価の視点１：学位授与方針及び教育課程の編成・実施方針を踏まえた学生の受け入れ方針の適切な設定及び公表

評価の視点２：下記内容を踏まえた学生の受け入れ方針の設定

本学は、学部・研究科の教育研究上の目的、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーを踏まえてアドミッション・ポリシーを定めている。

各学科のアドミッション・ポリシーは、学力の３要素（「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」）を踏まえて４つの項目で「求める人間像」を明示しており、ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーとの関連性、本学で実施している入学者選抜の方式と「求める人間像」との関連について示している。また、本学の概要や入試情報等をまとめた『大学案内』等に掲載し、入学希望者に十分な理解を促すとともに、全ての学科・専攻の情報をホームページ（情報公表）に掲載し、社会へ公表している（資料 1-6【ウェブ】、1-7【ウェブ】、1-15）。

例）工学部機械工学科のアドミッション・ポリシー

本学科は、ディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシーに定める教育を受けるために必要な、以下の「求める人間像」を備えた人を求めます。

求める人間像 1	1) 本学の建学の精神および基本理念を理解し、主体性を持って多様な人間と協働し、学び続ける意欲がある。
求める人間像 2 （知識・技能）	2) 高等学校の教育内容を幅広く学修している。 3) 工学を学ぶのに必要な高等学校における「数学」と「理科」の基礎学力を有している。
求める人間像 3 （思考力・判断力・表現力）	4) 基礎学力を応用する力やものごとを論理的に思考する力を有している。 5) 自分の考えを伝えるための表現力・コミュニケーション力を有している。
求める人間像 4 （主体性・多様性・協働性）	6) 機械工学をはじめ科学技術全般に強い関心と高い学習意欲をもち、機械工学技術領域を通して社会に貢献しようとする意欲がある。

〔学力入試〕
「求める人間像」の 3)、4)を重視し「個別筆記試験」および「大学入試センター試験の点数」によって選抜する。
〔AO ポートフォリオ入試〕
「求める人間像」の 1)、3)～6)を重視し「ポートフォリオ審査」「講義・実習・演習」および「面接」によって選抜する。
〔推薦入試〕
「求める人間像」の 1)、2)、5)、6)を重視し「書類審査」「小論文」および「面接」によって選抜する。
〔特別選抜入試〕
「求める人間像」の 1)、3)～6)を重視し「書類審査」「小テスト」「小論文」および「面接」によって選抜する。

点検・評価項目②：学生の受け入れ方針に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や運営体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。

評価の視点１：学生の受け入れ方針に基づく学生募集方法及び入学者選抜制度の適切な設定
評価の視点２：入試委員会等、責任所在を明確にした入学者選抜実施のための体制の適切な整備
評価の視点３：公正な入学者選抜の実施
評価の視点４：入学を希望する者への合理的な配慮に基づく公平な入学者選抜の実施

≪学生の受け入れ方針に基づく学生募集方法及び入学者選抜制度の適切な設定≫
本学は、多様な資質を持った者を的確に評価できるよう、アドミッション・ ポリシーに基づき、様々な選抜方法による入試を適切に実施している。入学者選抜制度の種別および選抜方法は以下のとおりである。

1) 学士課程
a) 学力入試
個別学力入試は、アドミッション・ポリシーにおける「高等学校の教育内容を幅広く学修している」および「各学科の専門科目を学ぶために必要な基礎的な学力を有している」ことを重視し、各学科の受け入れ方針に沿って個別学力検査 2 科目または 3 科目の方式、大学入試センター試験 2 科目と個別学力検査 1 科目を合わせた方式、大学入試センター試験 5 教科 5 科目を課す方式など多彩な入試方式により学力を測定し、入学者を選抜している（資料 5-1）。
なお、2019 年度入試まで学力入試の区分で実施していた特別奨学生試験は、選抜方法の見直しにより、2020 年度入試から総合型選抜入試として実施した。

b) AO ポートフォリオ入試
本学では、アドミッション・オフィス入試による選抜として AO ポートフォリオ入試を実施している。
AO ポートフォリオ入試は、アドミッション・ポリシーにおける「本学の建学の精神

および基本理念を理解し、主体性を持って多様な人間と協働し、学び続ける意欲がある」「各学科の専門科目を学ぶために必要な基礎的な学力を有している」および「基礎学力を応用する力やものごとを論理的に思考する力を有している」ことなどを重視しており、「書類審査（調査書・ポートフォリオ）」「各学科が行う講義・実習等の成果」および「面接」による総合評価で入学者を選抜している。

特に、志願者が出願に至るまでに修得した学業および学業以外の諸成果の根拠となる全ての書類（ノート、レポート、収集した資料、活動を記録した写真など）を「ポートフォリオ」として提出を求め、選抜に利用していることが特色である（資料 5-2）。

なお「講義・実習等」については、各学科がアドミッション・ポリシーで示す能力・資質等を適切に測定するため「小論文」「プレゼンテーション」「グループワーク」「ディスカッション」および「器楽演奏」など、多彩かつ柔軟な方法により実施されている。

例：国際関係学部国際学科 2019 年度 AO ポートフォリオ入試

求める人間像 4 （主体性・多様性・協働性）	世界各国・地域の人々の生活や社会制度、英語や中国語などの外国語、国際関係に強い関心と世界の動きを多面的に理解する学習意欲をもち、積極的に他者とコミュニケーションを図り、多文化共生社会や国際政治・国際経済・国際協力に関わる分野で社会に貢献しようとする意欲がある。
講義・実習等	小論文・プレゼンテーション ・小論文：「文化や社会、政治や経済などの国際的なトピック」に関するもの。ビジュアルを含む資料を読み、意見・感想を書く。 ・プレゼンテーション：「私の国際体験（海外経験に限らず、国内での多文化経験も含む）」に関するもの。発表の方式は問わないが、事前準備を必要とする。

c) 推薦入試

推薦入試は、アドミッション・ポリシーにおける「本学の建学の精神および基本理念を理解し、主体性を持って多様な人間と協働し、学び続ける意欲がある」「高等学校の教育内容を幅広く学修している」および「自分の考えを伝えるための表現力・コミュニケーション力を有している」ことを測る選抜方法である（資料 5-3）。

一般推薦試験は「書類審査」「小論文」および「面接」による総合評価で入学者を選抜しており、小論文については、各学科が「求める人間像」に基づいた設問としている（資料 5-4）。

例：経営情報学部経営総合学科 2019 年度 一般推薦試験

求める人間像 4 （主体性・多様性・協働性）	企業経営と情報に強い関心と高い学習意欲をもち、経営者や会社のキーパーソンとして強い意欲がある。または、情報システムの知識・技術に関わる領域や会計専門職や会計の知識に関わる領域を通して社会に貢献しようとする意欲がある。
小論文テーマ	AI（人工知能）技術の進展は目覚ましく、様々な分野で AI が使われるようになってきました。10～20 年後には半数の仕事が AI に取って代わられると予測されています。2016 年 Google DeepMind の AlphaGo が初めて人間のプロ囲碁棋士を破ったことで、にわかに現実味を帯びてきています。人間の働き場がなくなるという予測に対し、どう対処すれば明るい未来が開けるのか、思うところを論述しなさい。

この他入試要項に、高等学校在学中の文化・体育等諸活動、資格取得、留学経験、社会貢献など、指定した条件を満たしている場合は合否判定の段階で考慮すると明記し、入学後のリーダーシップや自発的な活躍が期待できる学生の受け入れを促進している。

併設校推薦試験・指定校推薦試験では「書類審査」および「面接」、特技推薦試験では「書類審査」「実技」および「面接」による総合評価で入学者を選抜している。

同窓生推薦試験は、2019 年度入試から導入した新たな選抜方式である。出願資格は①本学の建学の精神・教育理念に賛同し、本学を専願とする者 ②本学の卒業生が推薦する者 ③高校を卒業した者または試験実施年度内に卒業見込みの者で、全体の評定平均値が 3.5 以上の者 であり、入学者選抜は「書類審査（調査書・ポートフォリオ）」「小論文」および「面接」による総合評価で行っている（資料 5-5）。

d) 特別選抜入試

特別選抜入試として、海外帰国子女（海外修学経験者）特別選抜試験、外国人留学生特別選抜試験、社会人特別選抜試験を実施している。いずれの試験も「書類審査」「小テスト」「小論文」および「面接」による総合評価で入学者を選抜している（資料 5-6、5-7）。

2) 編入学試験

他大学で 2 年以上の課程を修了し、出願時に 62 単位以上を修得している者（または修得見込みの者）や、文部科学大臣により大学入学資格に係る指定を受けた専門学校を修了した者（または修了見込みの者）等を対象として編入学試験を実施している。

入学者選抜は「書類審査」「小論文」および「面接」の総合評価で行っている（資料 5-8）。

3) 修士課程・博士前期課程、博士後期課程

各研究科・専攻も学部・学科と同様に、アドミッション・ポリシーに基づき入学者選抜を実施している。

6 月試験（学内進学者対象）、10 月試験（一般、社会人、留学生）および 2 月試験（一般、社会人、留学生）を実施している。また、工学研究科においては秋学期入学試験を導入しており、6 月に実施している。

入試種別によって選抜方法は異なるが、「書類審査」「筆記試験」および「面接」の組み合わせにより、アドミッション・ポリシーで示す資質を備えているかどうかを判定している（資料 5-9）。

≪入試委員会等、責任所在を明確にした入学者選抜実施のための体制の適切な整備≫

本学は、アドミッション・ポリシーに基づく学生募集および入学者選抜を実施・運営するための組織として入学センターを設置し、各学部・研究科と連携して公正かつ適切な学生募集・入学者選抜を実施している（資料 5-10）。

また、学生募集および入学者選抜を適切に実施・運営するために以下の会議・委員会を組織している。

1) 「入学センター会議」

入学センター長を委員長とし、入試・学生募集を担当する副学長、学部長、研究科長を中心とする委員で組織し「中部大学入学センター規程」「中部大学入学センター会議規程」（資料 5-10、5-11）に基づき、以下の事項を審議している。

・アドミッション戦略に関すること
・大学及び大学院の学生の受け入れと確保に関すること
・大学入学試験並びに大学院入学試験の実施・方策に関すること
・広報活動等に関すること
・その他入試、広報に関し必要となる事項

2) 「入試・選抜委員会」

学長を委員長とし、副学長、学部長、研究科長、入学センター長を中心とする委員で組織し「中部大学入試・選抜委員会規程」（資料 5-12）に基づき、以下の事項を審議している。

・入学試験及び入学者選抜の在り方に関する事項
・入学者の選抜に関する事項
・その他入学試験及び入学者選抜に関する重要な事項

入学者選抜にあたっては、毎年入試結果について入学センターが学内資料を作成し共有するなど、「入試・選抜委員会」を中心に全学体制で綱紀の保持と厳正な入試の実施を行う取り組みができている。

大学入試においては、個別学力入試で課す 10 科目の問題作成主任および作成委員を全学の教育職員から選出・委嘱し、担当副学長の下で作成方針や留意事項を共有し、出題ミスの

防止に努めている。また、各入試は全学の教職員から委嘱された監督者、面接者、誘導者等が入学センターとの連絡を密に取りながら厳格に実施している。

さらに不測の事態に対応するため、学長、担当副学長の下、入学センターが関連部署と連携して入試を実施する体制を整備している。

大学院入試においては、研究科から選出された出題者、監督者、面接者等を学長が委嘱し、担当副学長の下で、研究科と入学センターが連携して試験を実施する体制を整備している。

≪公正な入学者選抜の実施≫

本学は、上記のような入学者選抜の実施のための組織・委員会を適切に整備するとともに、公平・公正な選抜を担保するために以下の取り組みを行っている。

・個別学力入試では、いずれの日程も同程度の難易度になるよう入試問題を作成している。
・AO ポートフォリオ入試、推薦入試、特別選抜入試においては、必ず複数の担当者による採点および採点チェックを実施している。
・合否判定の資料は個人が特定できない資料様式としている。
・個別学力入試の問題については、入試実施後、外部の専門業者に出題内容と本学解答に関する検証を依頼している。
・ホームページに入試問題および解答例、志願者数、受験者数、合格者数等の情報を公表している。
・学力入試、推薦入試の合否判定については、学長、担当副学長、入学センター長、大学事務局長、大学事務局次長などで入試選抜原案を作成し、「入試・選抜委員会」で学部長などの各委員に提案し、その原案を各学部で検討の上、必要な修正を加え、同日中に再度開催される同委員会において確認の後、合否を決定する。このように慎重な確認・議論を経て、合否判定の適切性と透明性を確保している。
・大学院入試の合否判定は、各研究科で入試選抜原案を作成し、それを「入試・選抜委員会」に提案・審議の後に決定する。

≪入学を希望する者への合理的な配慮に基づく公平な入学者選抜の実施≫

本学は各入試要項に、身体に機能障害があり受験上の配慮を希望する場合は、出願に先立って入学センターに申し出るように記載し、周知している（資料 5-1～5-3、5-5～5-9）。

申し出があった際は、受験生から病名や症状、希望する配慮の内容等を聴取し、受験上の配慮について検討・実施し、公平性の確保に努めている。

点検・評価項目③：適切な定員を設定して学生の受け入れを行うとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。

評価の視点１：入学定員及び収容定員の適切な設定と在籍学生数の管理

［学士課程］

本学では入学定員を適切に管理するため、学科ごとの過去の入学率や手続き後の入学辞退状況を慎重に勘案しつつ「入試・選抜委員会」で各入試の合否判定案を審議し、合格者を決定している。その結果、過去 5 年間（2015～2019 年度）の入学定員充足率の全学平均は

1.06 倍、学部ごとの平均は 1.04～1.07 倍、学科ごとの平均は 0.97～1.16 倍となっている。また、2019 年度の学部ごとの収容定員充足率は 0.98～1.05 倍、学科ごとは 0.93～1.13 倍となっており、入学定員充足率、収容定員充足率ともに、適正な数値を維持できている。

また 2018 年度入試からは、入学定員未充足の学科が生じないように、前期試験、大学入試センター利用試験、センタープラス方式の受験者から追加合格の措置を講じることができるようにし、入学定員管理の正確性をさらに向上させている。

なお 3 年次編入学については、過去 5 年間の編入学定員に対する入学定員充足率の平均は大学全体で 0.09 倍から 0.28 倍に留まっており、学生募集の方法等について改善方策を検討中である（大学基礎データ表 2）。

［修士課程・博士前期課程、博士後期課程］

本学では、大学院の入学定員・収容定員を充足し学生数を適正に保つために、以下の措置を講じている。

1）秋学期入学

工学研究科では、入学希望者の卒業・修了時期などに柔軟に対応した学生受け入れを行うために、秋学期入学を実施している。過去 5 年間の入学者実績は、2015 年度：1 人、2016 年度：4 人、2017 年度：3 人、2018 年度：12 人、2019 年度：12 人と近年、増加傾向にある。

2）長期履修学生制度

2015 年度入試から、修了までの学費総額を標準修業年限修了者と同一とした上で、修士課程・博士前期課程においては最長 4 年、博士後期課程においては最長 6 年を限度として、学生自らの希望に応じて、年単位で計画的に修業年限を延長することができる「長期履修学生制度」を導入、職業等に従事しながら大学院で学ぶことを希望する学生の学習機会を拡大した。

上記措置を講じたものの、過去 5 年間に入学定員を充足した研究科は、修士課程・博士前期課程においては工学研究科（2016、2017 年度）、応用生物学研究科（2016、2018、2019 年度）、博士後期課程では国際人間学研究科（2015 年度）、応用生物学研究科（2016 年度）、生命健康科学研究科（2017～2019 年度）であり、経営情報学研究科、教育学研究科については、この期間に一度も入学定員を満たしていない。

また、2019 年度の収容定員充足率について、修士課程・博士前期課程において 0.50 倍未満の研究科は経営情報学研究科（0.06 倍）、国際人間学研究科（0.38 倍）、教育学研究科（0.04 倍）、博士後期課程において 0.33 倍未満の研究科は経営情報学研究科（0.11 倍）となっており、冒頭の措置が全ての研究科において十分な成果を上げているとは言いがたい。

このような現状を踏まえ、2018 年度から「大学院整備充実検討委員会」およびその下に「大学院整備充実検討委員会 WG」を設置し、本学ならではの魅力ある大学院教育プログラムの開発を中心として、新たな改善方策の検討を鋭意進めている（資料 3-5、5-13）。

点検・評価項目④：学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

評価の視点１：適切な根拠（資料、情報）に基づく点検・評価

評価の視点２：点検・評価結果に基づく改善・向上

入学生の安定確保に向けて、入試種別の多様化や入試時期の弾力化さらには地区試験場の増設など、2008 年度以降、多様な活動を展開し、入学生の安定確保に努めてきた。その結果 2010 年度入試では志願者数は 1 万人を超え、2017 年度入試では、志願者数は 2 万人を超えるまでに至った。

その後、急激に変化し続けている全国情勢や将来予測に対応するため、2015 年度に新たなアドミッション戦略を策定し、その具体化に向けた取り組みを始めた（資料 5-14）。

入試選抜の執行・方法に関する適切性については「入試・選抜委員会」および「入学センター会議」において点検・評価を行い、次年度以降の入試の企画・執行に反映させている。

また入学後の学生の状況を追跡調査し、定期的に点検・評価を行っている。

この流れを踏まえた改善・向上に向けた過去 5 年間の取り組みと特記事項は〔表 5-1〕のとおりである。

表 5-1　入試選抜における改善・向上に向けた取り組みと特記事項

入試年度	取り組みと特記事項
2015 年度	・一般推薦試験専願の成績基準の見直し ・特別奨学生試験地区試験場の増設 ・前期試験 BM 方式の地区試験場の設置 ・大学院に「長期履修学生制度」を導入
2016 年度	・経営情報学部および国際関係学部の改組 ・後期試験の第 2 志望グループの変更
2017 年度	・特別奨学生試験地区試験場の増設
2018 年度	・工学部における学科改組・新設・定員変更 ・AO ポートフォリオ入試の導入
2019 年度	・同窓生推薦試験の導入

各学部・研究科では、全組織が定期的に実施する自己点検・評価において、アドミッション・ポリシー、学生募集、入学者選抜などの適切性に関する点検・評価を行うことで、改善・向上への取り組みへとつなげている。

（２）長所・特色

1) 入学生の安定的確保と受験生の着実な増加

各年度の入学者数の数値目標を設定し、各学部や学科の実情を踏まえ、オープンキャンパス、進学説明会、入学前教育や高大接続等における方策を計画・実行し、目標に対する進捗状況を点検管理してきた。その結果、入学志願者数は着実に増加している。

2) 入学定員の適切な管理（学士課程）

過去の入学率や入学手続き後の辞退状況を勘案しながら合格者数を決定している。その結果、少なくとも過去 5 年間の入学定員充足率と収容定員充足率は適切に管理している。

3)「多様な人材受け入れ戦略」に基づく、同窓生推薦試験の導入

本学の志願者は、愛知・岐阜・三重・静岡の東海 4 県の出身者が多く、2019 年度入試においては全志願者数の 93%を占めている。今後は、18 歳人口の減少を踏まえ、東海圏のみならず、全国から入学志願者を集めていく必要がある。この対策として、全国で活躍する本学の卒業生が推薦できる同窓生推薦試験を 2019 年度入試から導入した。

4)「志望実現力の重点評価戦略」に基づく、AO ポートフォリオ入試の導入

学生自らが自分の志望を実現していく意思と能力があるかを判断するために、出願に至るまでに修得した学業および学業以外の諸成果をポートフォリオとして提出を求め、各学科が行う講義・実習等を通して示された諸成果および面接によって評価し、入学者を選抜する AO ポートフォリオ入試を 2018 年度入試から導入した。

（３）問題点

修士課程・博士前期課程、博士後期課程の収容定員充足率について、大学基準で示された充足率に達していない研究科についての改善方策の検討が必須であり、新教育プログラムなどの新たな方策を検討している。

3 年次編入学の入学定員充足率については、受験者層の新規開拓をはじめ、学生募集の方法を中心として検討を進めていく。

（４）全体のまとめ

本学は、学部・学科、研究科・専攻ごとにアドミッション・ポリシー、「求める人間像」（研究科は「求める基本的な資質」）を定め、ホームページ、『大学案内』、入試要項等において適切に公表している。また、アドミッション・ポリシーに基づき、学生募集・入学者選抜を適切に運営・実施するための全学体制の組織・委員会として入学センター、「入学センター会議」、「入試・選抜委員会」等を組織している。さらに学部・研究科のいずれも、幅広く多様な資質を持った者を求めるべく様々な入試制度を設け、学長の下、各学部・研究科と

入学センターが連携して入試を実施し「入試・選抜委員会」において、公正な入学者選抜を行っている。

適切な入学定員の設定と収容定員による在籍学生数の適切な管理については、学部では入学定員、収容定員ともに大学基準協会の基準を満たしているが、編入学定員における編入学者数は少ない状況となっている。また、大学院では複数の研究科において入学定員と収容定員で基準を満たしていない状況にあり、改善が必要である。

学生受け入れの定期的な点検・評価とその結果による改善・向上の取り組みについては、入試の方式や、執行・方法に関する検討を行い、次年度以降の入試の企画・執行に反映させている。今後は、入試形態ごとの学生の入学後の追跡調査などの検証、アドミッション・ポリシーのより一層の明確化、学力の 3 要素を多面的・総合的に評価する入学者選抜方法の見直しに取り組んでいく。

以上のことから、本学の学生の受け入れは大学基準に照らして一部改善を要する点があるが、理念・目的を実現する取り組みとして評価できる。